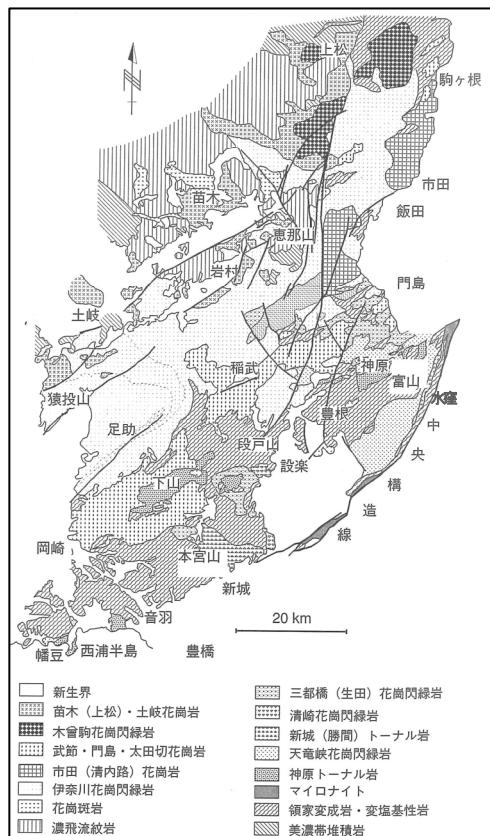


## 4. 領家帯

### 4.1 概要

領家帯は、西南日本内帯の最も南側に位置する。中部地方での分布は、北側から、長野県駒ヶ根市～静岡県水窪町～愛知県豊根村～岡崎市、そして、伊勢湾をはさみ三重県中部に分布する（図-4.1）。

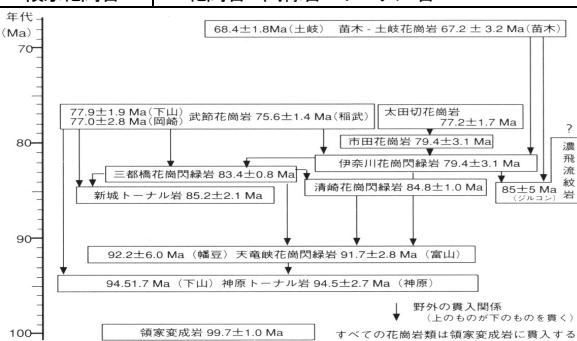


### 4.2 地質構成

領家帯の地質は、局部的に分布する領家変成岩と広域に分布する領家花崗岩に分けられる。主要な岩石は表-4.1に示すとおりであり、その原岩は美濃帯のジュラ紀の堆積物に移化していることと一部の含有鉱物の年代から推定されている<sup>1)</sup>。また、花崗岩については、図-4.2に示す岩体ごとの貫入関係が報告されている。

表-4.1 飛騨帯の構成岩石

地質	構成岩石
領家変成岩	・黒雲母片岩・黒雲母片麻岩・珪質片岩 ・珪質片麻岩・角閃岩・結晶質石灰岩
領家花崗岩	・花崗岩・閃緑岩・トーナル岩



領家変成岩は、100Maごろ形成され、他方これを貫入する花崗岩類は、貫入関係や形成年代から古期花崗岩類と新期花崗岩類に分かれ、最新の形成年代に基づくとそれぞれ90～95Ma前後と75～85Ma前後に形成されたと考えられる<sup>1)</sup>。

### 4.3 地質的特徴

領家変成岩は、黒雲母片岩や黒雲母片麻岩に代表される、低圧～中温～高温の変成岩で、片理が発達する。これらは、形成時に構造運動を被ったため、黒雲母や角閃石の濃集する黒い層と斜長石や石英の濃集する白い層とが縞状の模様を呈する。

領家花崗岩は、全体的に優白色な花崗岩であるが、有色鉱物の量比が岩体ごとに異なる。

中央構造線沿いに分布する花崗岩は、マイロナイトと呼ばれ、中央構造線の近傍において、高温下での変形・再結晶作用により細粒化し、花崗岩の組織を明瞭に識別できない岩石であり、縞状の組織が特徴的に認められる（図-4.3）。

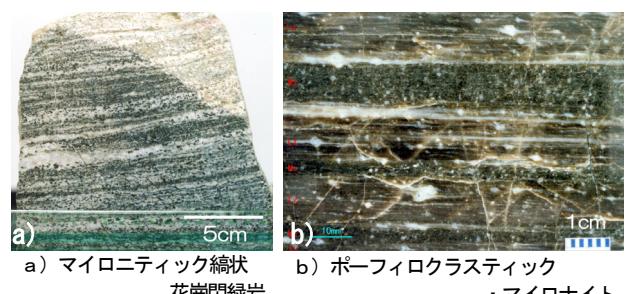


図-4.3 中央構造線沿いに分布する領家花崗岩類<sup>2)</sup>

### 4.4 土木地質的特徴

領家帯岩石の新鮮な部分については、堅硬であり、土木地質的に問題となることは少ないが、領家変成岩の片理面が流れ盤を形成する場合、崩壊の素因となる。領家花崗岩の風化部はマサ状となるため、構造物基礎としての支持力不足や、地すべり・崩壊の素因となりやすい。また、風化部に硬質な岩石が残留核として残る場合があり、ボーリングの堀止めや支持層確認に際して留意する必要がある（図-6.3参照）。

領家花崗岩の周辺には、花崗岩の貫入に伴い変質帯を形成し、弱層となっている部分がある。また、鉱化作用による重金属汚染の問題を引き起こす場合がある。

中央構造線沿いでは、マイロナイトなどの断層岩の出現や変形の著しい脆弱帶となっている箇所がある。

### 参考文献

- 1) 鈴木和博・三宅 明：領家帯、日本地質学会編 日本地質誌4「中部地方」、(株)朝倉書店、pp. 230～231、2006.
- 2) 大鹿村中央構造線博物館インターネット展示室：  
<http://www.osk.janis.or.jp/~mtl-muse/>